

夫婦間ストレス場面におけるコーピングのジョイントプロセス： ジョイント・インタビュー法を用いて

黒 澤 泰

問 題

程度の差はあれ、多忙や人間関係のいざこざなどの困難とともに人は生きていく。そのような困難に対し、時間の調整や気晴らしなど対処が行われる。このような対処はコーピング (coping) と呼ばれ (Lazarus & Folkman, 1984 本明・春木・織田監訳 1991)、研究知見の蓄積が進んでいる (高本, 2015)。

一方、夫婦のような親密な二者関係では、困難やその困難への対処は個人レベルに留まらないことが指摘されている (黒澤, 2014)。例えば、夫婦喧嘩のような夫婦間でのストレス場面は、夫婦双方に影響を及ぼすものであり、そのような夫婦間のストレス場面は、各々によって対処される。また、夫婦が直面したストレス場面 (例：子どもの急病) に対し、夫婦双方で情報収集することや、役割分担をして対処を行っていくことなど、二者単位の対処行動が行われることもある。

先行研究では、このような二者単位からみた対処行動は、夫婦コーピングスタイル：couple style of coping (Stanfield, 1998)、二者コーピング：dyadic coping (Bodenmann, 2005)、関係焦点型コーピング (Coyne & Smith, 1991) などと呼ばれているが、Badr (2004, p197)が、“既存のコーピングの研究文脈は、コーピングが起こる対人的な文脈を検討せず個人的な側面に焦点を当てている”と述べたように、個人単位の行動としてコーピングを調べた研究に比べ、このような研究は数少ない。

個人のコーピングプロセスに関する研究

一方、個人が行うコーピング研究においては、困難の発生、コーピング、困難の収束までの一連のプロセスに着目し、面接調査が行われ、困難、および、その困難へのコーピングを分類することに主眼が置かれている。

仕事や家庭における困難とそのコーピングに焦点を当てた先行研究では、個人に対して面接を行っているにもかかわらず、「配偶者と話し合うこと」や「夫婦での対処」など、個人内に留まらないコーピングプロセスが出現している。このことは、一者に留まらない二者視点の研究の必要性を裏付けているといえよう。例えば、共働き夫婦である9人の男性参加者と15人の女性参加者に対して個別に面接を行ったWiersma (1994)の研究では、分類の結果、仕事と家庭の役割葛藤には7つの主要領域があること、そのうち、6つの領域の困難に対するコーピングとして、「配偶者と話し合うこと」「家族で家事を分け合うこと」等が出現したことを報告している。また、ワーク・ファミリー・コンフリクトとそのコーピングに着目した加藤 (2002)の研究では、夫婦での対処¹⁾は13人 (31.0%)にお

いてみられ、さらに、コーピング後の変化をまとめたところ、夫婦での対処後に、「スムーズな生活」「夫への感謝」といったポジティブな変化が報告されている。

夫婦としてのコーピングプロセス

前述のように、夫婦間で何か問題が起き、その困難を解決する場合、単独で取り組むばかりではなく、親密な配偶者を巻き込み、共に解決に至る場合がある。例えば、Stanfield (1998)では、夫婦コーピングスタイル (couple style of coping) を明らかにしている。この研究では、面接調査を行い、共働き夫婦の主要なコーピングスタイルを、夫婦で家事分担を決めていないため、必要に迫られるまで家事を行わず、また、勤務時間に仕事が終わらないため、しばしば仕事を自宅に持ち変える特徴を持つ柔軟 (flexible) スタイルと前もってどちらかが家事を担当するかを決めており、結果的に役割ストレスが低い固定 (rigid) スタイルであると見いだしている。この知見は、共働き夫婦は、困難に対して自身でコーピングを行いつつ、夫婦双方が主体として関わるコーピングを行っていることを裏付けている。

夫婦間ストレス場面における対処

二者視点を持つコーピング研究の中でも夫婦間で発生するストレス場面とその対処行動について注目した概念として、関係焦点型コーピング (Coyne & Smith, 1991, 1994; 黒澤・加藤, 2013; Langer, Brown, & Syrjala, 2009) がある。心筋梗塞患者とその配偶者を対象にしたCoyne & Smith (1991)では、心筋梗塞という疾病をきっかけにして夫婦関係に危機が起こること、及び、その夫婦関係を維持しようとする認知的・行動的努力を関係焦点型コーピングであると提唱している。先行研究 (Coyne & Smith, 1991, 1994; Hagedoorn et al., 2000; Kuijer et al., 2000) では『配偶者を話し合いに参加させること、配偶者の気持ちについて尋ねること、その他建設的な問題解決』などの行動を示すactive engagementと『自身の懸念を隠すこと、心配を否定すること、(意見の) 不一致を避けるために配偶者へ譲ること』などの行動を示すprotective bufferingの2側面に加えて、回避的な関係維持 (escape-avoidance) を示す回避的な関係維持の側面があらわれた (黒澤・加藤, 2013)。

質問紙による夫婦間ストレス場面における対処研究の問題点

関係焦点型コーピングに関する先行研究では、夫婦ペアデータを用い、夫婦間のストレス場面に対して夫婦の各々が行う対処が、対処を行う本人やその配偶者に与える影響、また、対処の組み合わせについての知見を積み重ねてきた (Coyne & Smith, 1991; Hagedoorn et al., 2000; Kurosawa, Kato, Kamiya, 2015)。しかし、質問紙を用いた夫婦ペアデータの研究には、夫と妻それぞれが想起するストレス場面が異なりうるという欠点がある。言い換えるならば、夫婦ストレス場面として、夫は家計の問題を、妻は育児の問題を想起し、思い浮かべた別のストレス場面への対処行動をそれぞれが回答しているかもしれない (Kurosawa et al., 2015)。この点を考慮すると、夫婦が共に行う対処行動を検討する上で、「夫婦双方に共有されるストレス場面」をとらえる必要性があるだろう。

また、これらの研究は、一時点における関係焦点型コーピングの効果を検討したものである。従って、どのような文脈の中で関係焦点型コーピングが用いられ、夫婦内でのやりとりの連鎖（例：夫が積極的關係維持をした後に、妻が続いて積極的關係維持を行う）がどのように続くかはわかっていない。

これら二つの問題点を解決しうる方法論として、本研究ではジョイント・インタビュー法を用いる。

ジョイント・インタビュー

ジョイント・インタビュー (joint interview) (Arksey & Knight, 1999; 鈴木, 2005) 法は、面接者1人対面接協力者2人の形式で行う面接法である。

ジョイント・インタビュー法は、調査協力者としては、婚姻関係にあるものか一緒に暮らしているカップルを想定しており (Arksey & Knight, 1999), 同じ現象に対する二者の見方を得ることを目的としている (Allan, 1980)。ジョイント・インタビュー法は、個人面接とフォーカスグループの間に位置づけられ (Morris, 2001), 家庭生活は、ジョイント・インタビュー法が効果を発揮する領域の1つとされる (Allan, 1980)。

国内研究では、夫婦を同時に行う面接は、夫婦面接 (大塚, 1992), カップル・カウンセリング (中釜, 2008) などがキーワードとして使われている。大塚 (1992) では、事例研究を行い、ソーシャルワークにおいて、夫婦の交流を査定し、その交流に介入する有効性を示している。中釜 (2008) では、カップル・カウンセリングについて、概説、留意点、基本的な流れを説明し、事例を紹介している。これらの先行研究は、夫と妻両方を同時に面接するという方法は、主に臨床実践的な視点から捉えられていることを示している。これを裏付けるように、2016年8月の段階でCiniiを用いて、キーワード検索をしたところ、国内でジョイント・インタビューという単語をキーワードにした研究は存在しない。

ジョイント・インタビュー法の利点

Allan (1980)は、ジョイント・インタビュー法の明確な利点として、両方の配偶者を同時に面接することにより、同じトピックに対する二人分の評価や説明 (account) が得られることをあげている。研究者は、二人分の情報を得ることにより、個人面接の時よりも多くの材料を得る。これにより、同一のトピックについて複数バージョンの情報を得ることができ、二人の情報が相互補完的な働きをすることで事実関係の曖昧さが減少し、記録が信頼度の高いものになりうる (鈴木, 2005)。例えば、個人面接の説明からは、語られた出来事が本当に起きたかどうかを知ることは不可能であるが、ジョイント・インタビュー法においては、一方の配偶者が語ったその出来事が本当に起こったのかどうかを他方の配偶者に確認することが可能である。

ジョイント・インタビュー法のメリットは語りの内容についてのもののみにとどまらない。Allan (1980)は、より重要なのは、夫婦がともに面接の場にいることで得られる態度 (manner) であるとし、ジョイント・インタビュー法は、他の研究法ではなかなか得ることができない夫婦の相互作用 (interaction) を収集できると述べている。

本研究の目的

前述のように、夫婦のペアデータを統計的に分析し、困難やコーピングの相互影響を調

べる手法では、夫と妻の想起しているストレス場面が異なっている可能性がある。また、一時点における関係焦点型コーピングの影響に焦点が当てられており、どのような文脈の中で関係焦点型コーピングが用いられ、どのように続いていくか、言い換えるならば時系列的な視点が抜けている。

本研究の目的は、夫婦双方に共有されたストレス場面の発生、そのストレス場面に対する対処行動、対処行動の結果までの時系列の流れを、ジョイント・インタビュー法を用いて明らかにすることである。

対象の設定

本研究では、関係焦点型コーピングは個別の困難状況から発生する夫婦間のストレス場面の共通する次元に対するコーピングとしてとらえる。対象として未就学児を育てる夫婦を設定し、就業形態として、共働き、育児休暇、専業主婦の三タイプの夫婦を面接した。

まず、黒澤・加藤(2013)の日本語版関係焦点型コーピング尺度は、子育て期というライフステージの親世代を対象に作成されている。関係焦点型コーピングの枠組みを用い、夫婦に共有されたストレス場面とその対処に関して明らかにする本研究においても、量的な視点での先行研究と共通したライフステージであることは望ましいだろう。また、この年代の夫婦は家庭面、及び、職場面でのストレスが大きく(福丸, 2000)、家事の分担への評定などには夫婦の間でずれがあることがいわれており(Lee & White, 2005)、結果、夫婦間のストレス場面の発生があることを予想した。また、Stanfield(1998)が、共働き夫婦には、夫婦コーピングスタイルが存在することを示しているが、専業主婦家庭を対象にしていないため、専業主婦家庭を含めることには、代表性を高めるという点で意味があるだろう。

方法

手続き

本研究は、二期にわたって調査の募集を行った。子育て期夫婦を対象とした本研究の代表性を高めるため、第一期では共働き夫婦を、第二期では専業主婦家庭を対象に募集を行った。第一期では、2012年7月から9月にかけて、東北地方のミニコミュニティ誌の広告欄に「◇面接調査のお願い◇未就学児を育てられている共働きのご夫婦を対象に夫婦のやりとりに関する面接調査を行っています」と募集を3回かけた。募集の段階で協力の意志を示した夫婦は10組であった。専業主婦家庭1組、調査内容の詳細を聞き、先方から調査参加を辞退した2組を除いた7組から調査協力を得た。第二期では、2013年11月から2014年1月にかけて、「◇面接調査のお願い◇未就学児を育てられている専業主婦のご家庭を対象に夫婦のやりとりに関する面接調査を行っています」と募集を2回かけた。募集の段階で協力の意志を示した夫婦は7組であった。調査内容の詳細を聞き、調査参加を辞退した2組を除いた5組から調査協力を得た。面接場所は、著者が所属する大学院のプレイルームを用いた。なお、面接調査に協力した協力者1組につき、5,000円を謝礼として支払った。

面接手続きとしては、著者が夫婦同時に半構造化面接を行った。面接は十分にラポールをとった上で開始し、また、子どもを連れて来談した場合、保育を担当する院生を準備し

た。面接内容は、調査協力夫婦の書面での承諾ののち、適時、筆記にて記録を行い、またICレコーダーに録音した。面接時間は調査協力夫婦一組あたり、40分から1時間であった。面接終了後、逐語記録を作成し、分析のための資料とした。以降、面接者の発言は〈 〉、夫が発言した場合は夫「 」、妻が発言した場合は妻「 」と表記する。なお、本人の発話ではなく、伝聞の場合は『 』を用いる。

質問内容

フェイスシートの記入 入室した調査協力者は、まず、年齢、職業形態、結婚歴、子どもの年齢などをそれぞれ記入した。Wiersma (1994)で用いられた質問項目(1. どんな環境がその出来事を招いたか? 2. その問題を解決するためにどうしたか? 3. その行動の結果どうなったか?)を元に、本研究の質問内容は作成された。

困難の発生 本研究が焦点を当てる夫婦間ストレス場面を想起しやすくするため、〈最近、ぴりぴりすることや疲れることはないですか?〉〈相手(配偶者)が疲れているなど思うときはどのようなときですか?〉と個人が感じるストレス場面を尋ねた後に、〈お二人の間で、いわゆる夫婦喧嘩、そこまでいなくても、ちょっとぴりぴりした雰囲気の流れるときはどのようなときですか?〉と尋ねた。

困難へのコーピング 自身が抱える困難へのコーピング、配偶者が抱える困難へのコーピング、二人の間に発生した困難へのコーピングをそれぞれ尋ねた。二人の間に発生した困難へのコーピングに関しては、〈あなたの配偶者がそのような行動をとられたのに続いて、あなたは普段どのような行動をとっていますか?〉とコーピング行動の連鎖を尋ねた。

倫理的配慮

本研究では、1. 面接協力者の権利(例:面接への参加は自由意志によること、面接の最中でも面接の中止を求めること、回答が拒否できること)、2. プライバシーの保護(例:データの保管や処理、データは匿名化すること)、3. 面接調査の公表についての確認事項(例:博士論文や学会発表、学術論文として公表すること)の3点を、調査協力者の夫婦に面接承諾書で提示した。

調査協力者の夫婦の両者は、面接承諾書の内容を確認し、それぞれ署名した。その後、調査協力者の二人が署名した面接承諾書を面接者と交換した。これら署名した面接承諾書は、面接者と調査協力者がそれぞれ保管した。なお、本研究の実施に関して、第一著者の所属機関の研究倫理審査委員会の許可を得た。

分析の枠組み作り

本研究では、当初、夫婦間のストレス場面に対して行われる夫婦のコーピングに注目していた。しかし、コーピングには、ストレスの悪影響を軽減するものと、ストレス自体を起こらなくするものがあるということを本研究では想定した。

1つのストレス場面、及び、1つのコーピングをそれぞれ1エピソードとし、分析の単位とした。また、ストレス場面の分析軸として、職場、家庭、領域間のネガティブ・スピルオーバー、夫婦間ストレス場面を用いた。

分類の手順

発生した夫婦間ストレス場面に対してのコーピングに関しての分類は以下の様な手順で行われた。夫婦間ストレス場面におけるコーピングの分類に関しては、黒澤・加藤（2013, p71）の日本語版関係焦点型コーピングの枠組みを用いた。具体的には、語りの中に、関係焦点型コーピングの代表的な項目に類似したものがあつたとき、その項目が含まれる側面として語りを分類した。具体的には、“話し合う”、“言い分を聞く”、などの語りが出現した場合は、積極的関係維持に、“距離を置く”、“関わり合わない”などの語りが出現した場合には、回避的関係維持に、“意見がぶつかり合わないようにする”、“怒りを抑える”などの語りが出現した場合には、我慢・譲歩的関係維持にそれぞれ分類した。なお、関係焦点型コーピング以外の対処行動は、問題焦点型コーピングとして分類した。なお、分類は、内容の重複がないように留意しながら、著者が行った。

結果

回答者の基本属性

面接時における回答者の基本属性を示す。12組全てが同居していた（100%）。5組（A夫婦、B夫婦、C夫婦、E夫婦、F夫婦）は妻が働いており（41.6%）、2組（D夫婦、G夫婦）は妻が育児休業中（16.7%）であり、5組（H夫婦、I夫婦、J夫婦、K夫婦、L夫婦）は専業主婦家庭であつた（41.6%）。面接時における夫の平均年齢は33.33歳（ $SD=4.52$ ）、妻の平均年齢は32.75歳（ $SD=4.92$ ）であつた。第一子の平均月齢は、41.66か月（ $SD=28.50$ か月）であつた。

以降、A夫婦（A）からL夫婦を（L）と示す。また、引用された語りを、イタリックで示す。

夫婦のストレスの発生

個人が感じるストレス場面 個人が感じたストレス場面として、疲れやイライラの原因について尋ねたところ、以下のようなエピソードが語られた。12組中7組の夫（A, C, D, E, F, H, K）は、職務に関連したストレス場面（e.g. 職務内容の変更：C, 労働時間の長さ：D）を語つた。2組の夫（B, K）は、育児と私生活のバランス、2組の夫（G, H）は、夫「子どもができてから、（妻から）『なにかやっつて』といわれることが増えた」²⁾（G）、妻の気分のアップダウン（H）など妻について言及した。

妻に対して同様の質問をしたところ、12組中8組の妻（A, B, D, F, G, H, K, L）は育児に関連した内容（e.g. 子どもが言うことを聞かず、出かけるまでの準備が大変：D, 仕事で疲れたときに、子どもが思いつきぐずったりするとき：F, 子どもが親の言うことを聞かない：H）が語られ、2組の妻（B, E）は職務に関連した内容（e.g. 急に飛び込む仕事：B, 保育園のお迎えがあり、時間が制限されている中で、仕事量は同じくらい：E）が、1組の妻（H）は仕事と家庭の両立に関する困難、2組の妻（C, I）は、夫要因（e.g. 昔は、ねぎらいの言葉がないとイライラ：C, 夫の性格：I）についての内容を語つた。有職の母親の場合、仕事に関するストレスについて語られる場合があつた。

夫婦間ストレス場面 夫婦双方が共有する夫婦間で発生するストレス場面として、夫婦げんかや緊張場面について尋ねたところ、夫婦のストレス場面として、8エピソード語られた。夫婦のやりとりに関する1エピソード(C) (e.g. 妻が心配して言ったことを、夫が怒られているととってぴりっとする)、子育てに関係する3エピソード (e.g. 妻が仕事で疲れているときに、夫が寝かしつけてくれればいいのにと思ったりするとき:B、仕事が終わった夫が家に帰ってきて、そこで妻がイライラしてる。そういう状態の妻をみると、夫自身もイライラしてくる:F、子どもへの教育方針の違い:H)、生活習慣の違いに関する5エピソード (e.g. 夫自身がつまみぐいとか、おやつを買ってしまうこと [と夫は認識]:C、家計の状況を知らずに、夫の出費が多くなったりするとけんかになる [と妻は認識]:E、妻:(夫が) お風呂掃除やったとか、やらないとか、そんな小さなものしかない:G、妻:室内干ししたときのハンガーの向き:I、夫:他方の配偶者が家事や子育てで起きたことをきっかけにけんかをふっかけてくる:I) が語られた。

次の段落から述べていくコーピングの連鎖においては、“夫婦げんかがある”と答えたC夫婦、E夫婦、H夫婦、I夫婦に注目する。

コーピング

発生した夫婦間ストレス場面に対してのコーピング C夫婦、E夫婦、H夫婦、I夫婦では、夫婦間ストレス場面のコーピングとして、計6エピソード語られた。夫が謝り、妻がまだ怒っている場合、夫が距離を置き、妻がそれに引き続いて謝る(C)、言葉に発して仲直りする(C)、夫がふざけて、妻がそれにつられて笑ってしまう(C)、夫が謝る(E)、状況が放置され、冷めた頃に普通の話をする(H)、夫が妻の興奮状態が落ち着くの待ち、妻のテンションが下がったところで、夫婦げんかが収束する(I)であった。

以下、夫婦間ストレス場面への具体的なコーピングを示す。

1: 問題焦点型コーピング (ふざける, 謝る)

夫「変な冗談を言い出したりして、笑わせようと必死になる」(C)

妻「(夫婦げんかには) なんかこうきっかけがあって、私が、どうなってるの! って怒って、(夫が)『すいません』って」夫「本当にそれしかないよね」(E)

2: 積極的關係維持

夫「仲直りしたいという気持ちになった段階で言葉に発して、仲直りしてると思うんですよね」(C)

3: 問題焦点型コーピング (謝る) から回避的關係維持, 続いて積極的關係維持

夫「私は基本的にはすぐ謝ります。ただそれに『心がない』ってよく言われるんですけど、とりあえずすぐ謝って【中略】謝って、お互い謝ってそのあとに、なんでこうなったのかなっていうのを話し合いたい。でも、こっち(妻)はすぐずーっと怒ってるので、で、それがもっと長いと、こっちももういいやと思って、無視をし始める、感じの喧嘩、で、ほぼこっち(妻)から、3時間後4時間後ぐらいに『ごめん』って言いだして、そこで初めて『じゃあ俺もごめんね』って、っていう感じになる」(C)、

4: 回避的關係維持, 続いて、積極的關係維持

妻「メール、今でしたらラインとかで何事もなかったように、さらっとなんか質問みた

いな感じできてきて、私はそれを無視するんですけど」夫「仲直りしようとしな。意識は特にはないですかね。だからとって冷戦に突入すると言うこともない。ですけども、なんか自然に冷めていくっていうか」<そのパターンっていうのはいつも同じような感じでしょうか？>夫「うーん。まあ、謝るといふか、ほおっておいて冷めた頃に普通に話をしているって言う感じですかね」(H)。

夫「で、そんな時(夫婦げんかの時：筆者補足)は上がっているんで、お互いわーわー言っても仕方ないから、ある程度上がらないようになってるんですね。で、そのうち向こうが下がってくるので、夫婦げんかとしては一段落はするんですが、その発端になった原因っていうのが解決していない場合が多いので、基本的には僕はその原因の方を解決しようと考えます」(I)

夫婦間ストレス場面発生前に行われるコーピング 本研究では、8組の夫婦(A, B, D, F, G, J, K, L)が、「大きな夫婦げんかは特にはない」と回答した。この結果を詳細に検討するために、夫婦間ストレス場面を“起こさないように”行っていると語られた行動、また、文脈的に推察された行動を示す。本研究では、計9エピソード語られた。

関係焦点型コーピングの枠組み(黒澤・加藤, 2013)を用いたところ、我慢・譲歩的關係維持、及び、回避的關係維持に当てはまる語りが得られた。以下、具体例を示す。以下のエピソードを、我慢・譲歩的關係維持であると分類した。

<お二人の間で、夫婦げんかっぽい雰囲気になったりとか、ちょっと緊張が出てくるような時っていうのはありますか？>妻「んー、(夫婦げんかを)なんかうまく回避しているのかな。(夫に対して)、いやいや、なにやってんだというか、もう少し手伝ってほしいなというのは、実際あったりするんですけど、でもー、すごく、夫は夫なりに協力してもらっているんで、私は不満とかは思わないし、あと、例え、思ったとしても、口に出さないほうがいいのかもしれないかなと思ったりしているんで」(A)。

夫「自分がイライラしてるのはわかりますけど、口に出しては言わないで、ある程度様子見て」(F)。

夫「なんかこれ以上のったらダメだな、けんかになるなっていうときはあるんで、そこはもう、そんなときはもうグッとこらえて」<やっぱりわかりますか？>夫「わかりますね。買い言葉は言わないように」(J)。

夫「(妻は：筆者補足)物出しっ放しによくするんですけど」<それは奥様がですか？>夫「そうです。で、片付けるとかよく言ってたんですけど、一回それで大げんかしちゃって」妻「子ども見ながらこまめに物出して片付けてできないんで」夫「それがあって、けんかじゃないですけど、今は、結局(妻に：筆者補足)言ってもじぶんがやることになるんで、それなら言わない方がいいって妻に言われたんですね。なので、そこで抑えて(片付けを)やる」(K)。

及び、以下のエピソードを、回避的關係維持であると分類した。

夫「まあ、少しは分かりますよね。(妻は)不満はあるなあと。でも、私はあんまり気にしないだけ(笑)」(D)。

夫「けんかするときに、冷静に物を考えられなくなるじゃないですか。それで、一回気分転換に出て行くと、自分の中で整理をつけて帰ってくる感じです」(K)

また、夫婦間ストレス場면을発生させないために、夫が家事を積極的に行うという行動が語られた。以下、エピソードを示す。

夫「僕はそこまで人間ができていないので、ああそうですか、とって黙々と家事をやるぐらい」(A)、

妻「(夫は) 家事を進んでやってくれる」(B)、

夫「そのときは頑張って率先して、家事をやってるな、ごめんなさいっておもしろいながら」(L)。

考 察

コーピングのジョイントプロセス

本研究では、ジョイント・インタビューを用いて、夫婦それぞれに共有されるストレス場면을想起させ、そのストレス場面への対処を関係焦点型コーピングとコーピングの側面から分類した。本研究の第一の意義は、一つのコーピングがとられた後、別な種類のコーピングがとられること、言い換えるならば、コーピングの連鎖を示したことにある。

本研究の結果から、夫婦の一方のコーピングに対して、他方の配偶者が納得しない(C)などの場合、異なる種類のコーピングがとられることが示唆された。C夫婦における妻は、夫の謝るというコーピングを「その場のいざこざを収めるために、謝っているのは分かってるんですけど、すぐ謝っても、なんで怒ってるかが理解してくれないので、同じ事を何回もするんですよ」(C)と評価した。これは、夫の謝るというコーピングを妻が信頼していない状況であるといえる。その妻の行動に対して、夫は「こっちももういいや」と回避を始める。しかし、夫婦の双方には関係維持の意図が存在し、妻が「ごめん」と謝ることで関係維持を図る。その妻のコーピングに引き続き、夫も「じゃあ、俺もごめんね」というコーピングを行うというプロセスを経て、夫婦間ストレス場面は収束していく。

質的な手法を用いた先行研究(加藤, 2002; 東海林, 2006; Wiersma, 1994)では、成人期以降の個人が抱えるワーク・ファミリー・コンフリクトなどの困難と行うコーピングを分類した。これらの知見に加えて、本研究はコーピングを行った一方の配偶者のコーピングに関して、他方の配偶者がどのようにコーピングを知覚し、どのようにふるまうのかを提示したこと、また、他方の配偶者のふるまいを受けて、一方のコーピング実行者は次にどのような行動を行うのか、つまり、コーピングの連鎖を示したことに新規性が存在する。このように、一方の配偶者のコーピングに引き続き、他方の配偶者のコーピングが行われ、困難が収束に向かっていく二者が関与するコーピングプロセスは、コーピングのジョイントプロセスといえよう。

夫婦間ストレス発生前の行動

黒澤・加藤(2013)では、夫婦間ストレス場面において、積極的関係維持が適応的、回避的関係維持は非適応的、我慢・譲歩的関係維持はニュートラルなものであるという結果を示している。本研究でも、C夫婦から、「仲直りしたいという気持ちになった段階で言葉に発して、仲直りしてると思うんですよ」と積極的関係維持に関連する語りが得られた。

しかし、本研究では、夫婦間ストレス場面が発生する前の段階において、残り2つの方略(回避的關係維持、我慢・譲歩的關係維持)が予防的に使われている可能性を示した。I夫婦では、夫「けんかをしている時はそんなこと言ってらんないので、そういうときでやっぱり、僕の方がある程度何かを飲み込む場合が多いです」というように我慢や譲歩を行い、夫婦間のストレス場面の発生や、相手とのさらなる関係性の悪化を防ごうとする行動が語られた。また、夫婦間ストレス場面の発生に関して、妻「んー、なんかうまく回避しているのかな」(A)、夫「けんかするときって、冷静にもの考えられなくなるじゃないですか。それで一回気分転換に出て行くと、自分の中で整理つけて帰ってくる感じです」(K)と回避の有効性を振り返る語りをおこなっている。

樫村・岩満(2007)は、感情抑制はその全てが不適応につながるのではなく、関係性の維持などの適応的側面を備えていると述べ、人間が社会的営みを行うためには、必要不可欠であるとしている。また、回避に関しては、対象は大学生であるものの森田(2008)が、回避的なコーピングは対人場面におけるストレスを軽減させることを示している。本論において、我慢・譲歩的な行動と回避的な行動の有効性が示されたことは、樫村・岩満(2007)や森田(2008)の視点を裏付けるものであろう。

ジョイント・インタビュー法の意義

次に、本研究のジョイント・インタビュー研究への貢献を述べる。本研究では、夫婦が同時に面接することにより、他の方法論では収集できない類の情報収集を行うことができた。

C夫婦では、本人が意識していないことが配偶者から指摘される“指摘”，D夫婦，I夫婦では1つの質問に対して、夫婦で相談し合いながら答える“共同回答”，E夫婦では、他方の配偶者の語りへの“補足”，G夫婦では、同じ回答を同時に答える“同時発話”などが観察された。このようなデータは、Allan(1980)が述べたような夫婦の相互作用であり、ジョイント・インタビューによって確認できたといえる。

本研究では、これら相互作用的な側面を分析の焦点に置いていないため、今後はこの点を分析に組み入れた研究が必要であろう。例えば、共同回答をしながら語る夫婦と一方の配偶者が他方の配偶者の発言を遮りながら語る夫婦では、語られる内容が同じであっても、夫婦として異なる特徴を持つかもしれない。

また、本研究は、面接協力段階での面接協力者の状況を尋ねるため、面接により語りが増える前の段階のものを分析に用いた。本研究では、他方の配偶者の意見を聞くことによって、一方の配偶者の意見が変化したこともあった。I夫婦に対して、夫が行う家事分担割合を尋ねたところ、夫は「(全体の)1/3」と答え、妻は「(全体の)1/4」と述べた。それに引き続き、妻は「さすが、でも、それは、あれ、価値観の違いだね。いってみなきゃわかんない」と述べていたが、夫の言い分を聞くことで、妻の意見は「あ、でも、そっかー。そういうのを聞くと、1/3って感じがする」と変わった。このように、夫婦の対話の中で、個人の語りが増えることを示した点もジョイント・インタビュー法によって明らかにされた点であろう。

また、同じ出来事に対する夫婦双方の認知の違いを示すエピソードもあった。C夫婦にて語られた夫婦間のストレス場面であるが、夫は「自分がつまみ食いをしたり、おやつを

買ってしまうからけんかになる」と認識しており、妻は、「妻が心配や忠告を言っても、夫が怒られていると受け取って、びりっとしやすい」というように、認識していることが示された。また、I夫婦においては、妻は「室内干した時に、ハンガー、私はこっち向きが好きなんです、この人は必ず逆向きなんです。こうなったりあーなったりしているのは、私嫌なんですよ」と生活習慣の違いと認識しており、一方、夫は「やっぱり、今お話にあったとおり、基本的に何か夫婦げんか的なものが勃発する時っていうのは、この人(妻：筆者補足)が発端な場合が多いです」と妻要因であると述べていた。このように、夫婦に共有された出来事に対する、夫婦の双方の知覚の違いを示した点にも本研究の意義があるだろう。

本研究の限界

最後に、本研究の限界を述べる。まず、本研究の対象は、未就学児を育てる共働き家庭、及び、専業主婦家庭であり、初期段階の夫婦を対象にしている。従って、本研究の知見が思春期の子供を持つ夫婦や介護期の夫婦など他のライフステージにある夫婦に当てはまるかは不明である。本研究でも、F夫婦から、妻「結構言い争いみたいなのも始めのうちは何度かあったので。そこからしばらくたって、あんまりなくなったので、多分、お互いこういう時はこうした方がいいかなっていうのが、暗黙の了解じゃないけどあるような気が」、と結婚当初と比べてけんかが少なくなったという語りが報告されている。年月を経て、夫婦相互の理解が深まった段階において、本研究の知見は再検証される必要があるだろう。

また、ジョイント・インタビュー法自体の限界として、夫婦で行き違う説明に関して、どう重みづけるのかは難しい(Allan, 1980)、男性の発話が減る傾向にある(Seale et al., 2008)という点があり、この点に関する検証が今後求められる。特に、C夫婦の場合、夫が認識している夫婦間ストレス場面の要因は、“自分の生活習慣”であり、妻の認識している夫婦間ストレス場面の要因は、“自分の言葉がけを夫は怒られているととる”であった。本研究では、この2つの語りをそれぞれ共有された同一のストレス場面の2つの認識のあり方ととらえたが、今後の研究において、夫婦双方の共通認識に至るまで話を聞いていくか、夫婦それぞれ独立のものとして扱っていくかなど、同じトピックに対して夫婦で認識が異なる話題についての取り扱い方を検討する必要がある。

付 記

本研究は、2013年度東北大学大学院教育学研究科に博士論文として提出し、第一著者の著書である”仕事と家庭の相互影響下における夫婦二者間コーピング”(風間書房より出版)の8章のデータに、5組の夫婦データを追加し、大幅な修正と再分析を加えたものである。

また、本研究の一部は、International Association for Relationship Researchの年次大会で発表された(Kurosawa, T. (2016). Joint Process of Coping with Marital Conflict. International Association for Relationship Research, Toronto, Canada.)。

本研究は、科研費の助成を受けた(特別研究員奨励費24・8092, 研究代表者, 黒澤泰／

若手研究B 16K17315, 研究代表者, 黒澤泰/基盤研究B, 24330191, 研究代表者, 加藤道代)。

謝 辞

大学院時代にご指導頂いた, 東北大学大学院教育学研究科加藤道代先生に深く感謝いたします。また, 本研究に対して, 有益なコメントを頂いた, 新潟青陵大学大学院, 横谷謙次先生に感謝いたします。

脚注

- 1) 原論文での表記を尊重し, 「夫婦でのコーピング」ではなく, 「夫婦での対処」を用いる。
- 2) このストレス場面は, 妻からはストレス場面として共有されておらず, 夫が感じているストレス場面だったため, こちらに含めた。

引用文献

- Allan, G. (1980). A note on interviewing spouses together. *Journal of Marriage and the Family*, 42, 205-210.
- Aquilino, W. S. (1993). Effects of spouse presence during the interview on survey responses concerning marriage. *Public Opinion Quarterly*, 57, 358-376.
- Arksey, H., & Knight, P., T. (1999). *Interviewing for social scientists*. London: Sage Publications.
- Badr, H. (2004). Coping in marital dyads: A contextual perspective on the role of gender and health. *Personal Relationships*, 11, 197- 211.
- Bodenmann, G. (2005). Dyadic Coping and Its Significance for Marital Functioning. In Eds, Revenson, T. A., Kayser, K. E., & Bodenmann, G. E. *Couples coping with stress: Emerging perspectives on dyadic coping*. Washington DC: American Psychological Association.
- Coyne, J. C., & Smith, D. A. F. (1991). Couples coping with a myocardial infarction: A contextual perspective on wives' distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 404-412.
- 福丸由佳 (2000). 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連. *家族心理学研究*, 14, 151-162.
- Hagedoorn, M., Kuijer, R. G., Buunk, B. P., DeJong, G. M., Wobbles, T., & Sanderman, R. (2000). Marital satisfaction in patients with cancer: Does support from intimate partners benefit those who need it most? *Health Psychology*, 19, 274-282.
- 櫻村正美・岩満優美 (2007). 感情抑制傾向尺度の作成の試み: 尺度の開発と信頼性・妥当性の検討. *健康心理学研究*, 20, 30-41
- 加藤容子 (2002). 共働き女性のワーク・ファミリー・コンフリクトへの対処: 夫婦の関係性の観点から. *経営行動科学*, 16, 75-87.
- Kuijer, R. G., Ybema, J. F., Buunk, B. P., DeJong, G. M., Thijs-Boer, F., & Sanderman, R. (2000). Active engagement, protective buffering, and overprotection: Three ways of giving support by intimate partners of patients with cancer. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 19, 256-275
- 黒澤泰 (2014). 仕事と家庭の相互影響下における夫婦二者間コーピング. 風間書房.
- 黒澤泰・加藤道代 (2013). 夫婦間ストレス場面における関係焦点型コーピング尺度作成の試み. *発達心理学研究*, 24, 66-76
- Kurosawa, T., Kato, M., & Kamiya, T. (2015). Relationship-focused coping patterns of Japanese child-rearing couples. *Journal of Relationships Research*, 6, e7.
- Langer, S. L., Brown, J. D., & Syrjala, K. L. (2009). Intrapersonal and interpersonal consequences of protective buffering among cancer patients and caregivers. *Cancer*, 115, 4311-4325.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company. (ラザルス, R. S.・フォルクマン, S.本明 寛・春木 豊・織田 正美 (監訳) (1991). ストレスの心理学——認知的評価と対処の研究—— 実務教育出版.

- Lee, Y.-S., & Waite, L. J. (2005). Husbands' and wives' time spent on housework: A comparison of measures. *Journal of Marriage and Family*, 67, 328-336.
- 森田美登里 (2008). 回避型コーピングの用いられ方がストレス低減に及ぼす影響. *健康心理学研究*, 21, 21-30
- Morris, S. M. (2001). Joint and individual interviewing in the context of cancer. *Qualitative Health Research*, 11, 553-567.
- 中釜洋子 (2008). 家族のための心理援助. 金剛出版.
- 大塚美和子 (1992). ソーシャルワークにおける夫婦面接についての一考察：システムズ・アプローチに基づく夫婦関係への積極的な援助方法. *ソーシャルワーク研究*, 17, 273-278.
- Seale, C., Charteris-Black, J., Dumelow, C., Locock, L., & Ziebland, S. (2008). The effect of joint interviewing on the performance of gender. *Field Methods*, 20, 107-128.
- 東海林麗香 (2006). 夫婦間葛藤への対処における譲歩の機能：新婚女性によって語られた意味づけ過程に焦点を当てて. *発達心理学研究*, 17, 1-13.
- 東海林麗香 (2009). 持続的關係における葛藤への意味づけの変化：新婚夫婦における反復的な夫婦間葛藤に焦点を当てて. *発達心理学研究*, 20, 299-310.
- Stanfield, J. (1998). Couples coping with dual careers: A description of flexible and rigid coping styles. *The Social Science Journal*, 35, 53-64.
- 鈴木淳子 (2005). 調査的面接の技法, 京都：ナカニシヤ出版.
- 高本真寛 (2015). コーピング行使が翌日の感情へ及ぼす影響に関する日誌法による検討. *心理学研究*, 86, 10-20.
- Wiersma, U. J. (1994). A taxonomy of behavioral strategies for coping with work-home role conflict. *Human Relations*, 47, 211-221.

Joint Process of Coping with Marital Conflict

Tai Kurosawa

Our study aimed to clarify coping and preventative behaviors used by couples when experiencing stressful events. We used qualitative methods with a focus on the joint interview method (Arksey & Knight, 1999), in which the researcher interviews two participants simultaneously to gain an understanding of both perspectives on the same phenomenon. In this study, we conducted joint interviews with 12 Japanese married couples who had preschool children. We asked about the start of stressful events, ways of coping, and the conclusion of stressful events. Our results described the sequence of coping behaviors for daily marital conflict and the preventative effect of protective buffering and escape-avoidance. We found that the other partner's response determined the joint process of coping within couples. Furthermore, our findings showed that an avoidant style of relationship-maintenance and compromise was effective in preventing marital conflict.